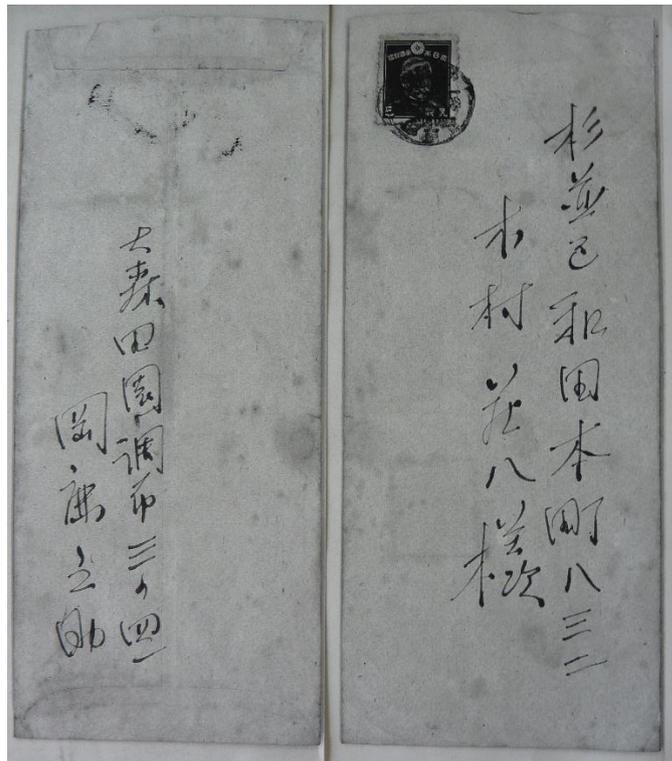


書簡 岡鹿之助→木村莊八 昭和十八年八月五日



(宛先)

杉並区和田本町八三二

木村 莊八 様

(差出)

大森田園調布三の四一

岡鹿之助

水戸海辺から帰へり、元気で油絵に向つてゐます。いろいろと魚を獲りましたが、夜分の十時頃帰宅。冷蔵庫がないので、貯蔵不可。すぐに人々に別け与へ、和田堀方まで持参出来ず残念でした。けえず、ぼら(二本なれどいずれも尺余の大物)、ふっこ、いしもち、それに珍しくあかえいのでつけえのがひっかかりました。近來の大漁。木箱二夕箱につめて、愚弟、義弟がエンヤエンヤと持ちかへったことです。食べてみたら、どれもさして美味しいとは思ひませんでした。

先日放庵先生宅でお別れし、横浜の告別式へ。みちくこの暑いのに、学士会館での会議を思ひ、御苦勞の程お察しました。その折りの御報告、只今落手、有難く拝誦しました。

○

大嶺(政寛)、柴田(恕夫。昭和二十一年会友で逝去)、田川(勤二)、田中(寿太郎)、新沼(杏二)、本莊(起)の六名に対する御配慮のこと、僕としては大々賛成。この連中に、今から治まつてもらつては大変です。春(陽)会のため大いに頑張つてもらひたく、蚊(文)展あたりで大あばれにあばれてもらへれば、一つには各自のため、二つには会のため、こんな結構なことはないと思ひます。前線への理解ハ了解に小生からも大いに務めませう。それこそ喜んでします。

ただ、前線といふ意味は、無蚊(サ)もれの六名の連中及び、その雰囲気

○

本年の蚊(文)展にては、美術本位であたるが宜しからんと御忠告、何より望ましいこと。春会のつわもの、一つピクアップいたしたきものと期待これ大いなるものあります。「その他の大体のカンのやうなことは、中川(一政)任せよろしからん」云々は喜服。

○

次の時代にバトンを渡し得る人を心がけよとの一言、ぼく、無意識(?)のうちに、常に人はいないか〜と探す心しきり。御手紙の中に突如として吉田貫三郎(昭和十八年、第二十一回出品者)の名前出現して思はず微笑を禁じ得ませんでした。文中、水谷君も「吉田ですか」と、次に来る者の名を挙げてゐますが、この「吉田」は貫三郎なりやダルマ(吉田達磨)なりや。僕、貫三郎にいと目をつけており、絵は描ける人なり。但し、目下の所、獨創性に乏しきが如く、いつぞや画談会で御本人にさう申したことあり。挿絵を捨てオマンマの心配もあるでせうが、今後本画に打ちこむとか。

いつぞや御本人より、□□の随筆を読んで、河童の絵のくだりなど面白く思ひ、人物評にもおもしろきものあつたやうに覚えてゐます。氣一本の所のあるのが、僕はこの人に期待をかける所以です。旧友、南馬にしても三雲にしても、子供っぽいひたむきな所は、貫ちゃんにかなはないやうな気がします。楽しみな人の一人。満洲より小生にも既に二回ほど文通がありました。

他に、僕は柴田をあげます。会務の如きもの果してこの人に出来るかどうか知りませんが、人間はよろしく、仕事第一等。昨年蚊(文)展出品下見

の折の豹変ぶりは、そのよしあしは別とし、僕は驚きました。この人は非とも立派な画家になつてもらひたく、陰ながら本気で念じてゐるのです。本莊君、画の素描にかへり、まづしき裡にコツ〜とはげみなば、必ずよろしきもの生まれんものと期待します。本年のビョーブには僕、あの心ていにおいて参りました。ヒロイスムに淫して得意らしかったけれど、春会でドカンとやられ果して目が覚めたでせうか。心配しています。

二見利節は加山君の云ふ如くには僕買へません。美から遠いから……。吉田達磨、この人の仕事どうも僕には解しかねます。

中谷君、オモチャ式が霧消すれば宜しいでせうね。

高田(力蔵)君のことは小生も万々承知のつもり、御節同感です。

三雲(祥之助)入道が仕事でどん〜のびて呉れると有難いのですがね。

南馬は、まだ数年こつちが辛抱して見てゐないと解りますまい。

○

山本(鼎)先生におし出されて、大人が止むに止まれず王道を実演されたことは、はつきり覚えてゐます。ホカの会だったら、大人の足をフミつけても御説明役をやりたい人ばかりでせう。春陽の忝さがこんなところにあるのだなアと、いつかあのお話を承つた時しみじみ思つたことがあります。

大人は、僕をおし出されたが、六眼(岡自身)はハツと思ふとたんにドキマギ、困つた〜と頭ばかりかいてゐるので、物笑ひになつてゐます。どうもいけません。パリで仕事をしてゐる時、まさかこんなハメにおちい

るとは思ったこともないので、あわてる事〜。つらいやら、うれしいやら、ありがたいやら、なさけないやら……。奥さんのお言葉、伺って冷汗三斗の思ひ。

話がほかに飛んで。

水戸より帰宅早々なので、まだ画冊はお得意様に持って行きませんが、二、三日中に実行します。画冊拝見して、失礼重々申し訳なく思ひますが、若山（為三）、倉田（三郎）諸先輩の絵は、折角の画冊をダイナシにするやうな気がして、殊に若山さんのものは、僕腹が立ちました（こんな事を申してかんべんして下さい）。放庵先生の絵と一緒に入っていること自身がイヤな気がします。あれは宜しき絵なるや。もし宜しきものならば、僕今後日本画については一切口外いたすまじ。若山、倉田、そして足立先生など油絵描いていただけぬものでせうか。

二冊の中（即ちお得意の中）一つは、うまくゆかぬかも知れません。値のあがった点が心配（先方金持に非ざれば）。おふくみおき下さい。

只今、おっかけ御端書飛来。なにかと読みしに『新美術』八月号の拙稿についての御芳志。ありがたく思ひますが、過褒〜。痔の見舞をもらひ返事に、楽屋展のよろしさを大下さん（大下正男、美術出版社社長）に書いたら、とつつかまって五枚でいいから書けとの急なたのみ、つまらぬ事を書きました。

奥さん御依頼の帯は、心にかかつてゐながら、却々手が出ません。お袋が、もう夏も過ぎるのに……。と気をもんでゐます。もう少し気が楽になったら、きつと描きます。宜しくお詫び下さい。

留守中に魚河岸の伊川兄さん、羊羹をとどけて呉れました。昨日、菊三郎君信州の林檎をわざ〜とどけて呉れました。一つ〜に心のこもった林檎、うれしく味わいました。

高橋貞一郎さん（長野県出身の洋画家）が突如昨日見えて、モワ〜ツと話して行きました。

木先生

七月五日

（欄外）「児玉希望 早わかり」却々よろしな

（なかなか）

⑥

—以上—

1943 5 August

書簡 昭和 18 年 8 月 5 日 岡鹿之助→木村莊八